

2016年10月

通巻第28号

季刊 2016-IV

[www.mex-jpn-amigo](http://www.mex-jpn-amigo)

発行人：上原尚剛

編集人：河嶋正之

鴻巣勝明

事務局：笠井道彦

メキシコ歴史文化講演会 2016：第3回講座「改革期」の報告

## 「メキシコ帝国再建の夢と皇后カルロッタ」

京都外国語大学教授 立岩礼子

### メキシコを取り巻く情勢

19世紀半ば、ヨーロッパでは自由主義が吹き荒れていた。保守派である王侯貴族の特権が剥奪され、カトリック信仰の優位性は失われ、教会財産も没収の対象となった。各国の王室は、ポルトガル王室がブラジルに渡ったように、その存亡をかけて策をめぐらせた。産業革命が進展し、市場拡大のため植民地獲得も激化していた。これに乗じて、カトリック教会はアジアやアフリカにおける布教の強化・拡大を図った。イギリス大英帝国に植民地経営を出し抜かれたフランスのナポレオン3世は、インドシナを占領した後、フランスとアジアの間に位置するメキシコ獲得に乗り出す。イギリスが占領するインドを回避し、メキシコのテワンテペック地峡を通して、日本と中国との直接貿易を実現するためである。このナポレオンの構想を支援したのが、ローマ教皇ピオ9世であった。

当時、メキシコでは先住民フアレスを大統領とする共和国が誕生しており、自由主義を掲げて教会権力の一掃を図っていた。この共和国政府に反発したのが、植民地時代からの恩恵を受けていたメキシコの上流層や教会であった。また、隣国アメリカ合衆国は、南北戦争の勢いに乗って、フアレスの保守派追放政策を支持し、メキシコへのヨーロッパ列強の干渉を牽制した。こうした情勢の真ただ中、ナポレオン3世の構想を実現すべく白羽の矢が立ったのが、かつてメキシコを統治したハプスブルグ朝の第2皇位継承者マキシミアン（1832-1867）とヨーロッパ列強と親族関係にあった新興国ベルギーの王女カルロッタ（1840-1927）との若きロイヤル・カップルであった。

### メキシコでの歓迎



1864年5月28日、マキシミアンとカルロッタは、先住民のための国家をつくろうと憲法草案までたずさえて、ベラクルスの港に上陸した。しかし、ロイヤル・カップルを歓迎する人はまばらであった。当時のベラクルスは伝染病にかかりやすい不衛生な町だったため、わざわざ首都から迎えに出向く者はいなかったのである。ふたりはプエブラに到着し、ようやく皇帝夫妻にふさわしい熱狂的な歓迎を受ける。帝国の紋章やふたりの顔が彫刻された凱旋門がいくつも用意されていたのである。「今日の歓迎は私が新しい祖国にいることを実感させてくれました」と、カルロッタは皇后として初めてのスピーチを行った。

その後、一行は、壮麗なポカテペトルとイスタシワトルを見ながら、メキシコ市へ向かった。カルロッタ自身、「同行しているメキシコ人でさえも道が凸凹のせいで憔悴し、なぐさめる言葉も見つからない」が、「背骨がずれようが、肋骨を折ろうが、そんなことくらい冗談で吹き飛ばしてみせる若さが私た

### ＝ 目次 ＝

- |  |       |       |
|--|-------|-------|
| 1. 第3回講演会報告：「メキシコ帝国再建の夢と皇后カルロッタ」                             | 立岩礼子  | ...1  |
| 2. 第4回講演会報告：「フリーダ・カーロ～フェミニズム運動に影響を及ぼした国際的画家」                 | 山本厚子  | ...3  |
| 3. 私とメキシコ：「メキシコイベントは一日にして成らず」                                | 蔵野佳好子 | ...7  |
| 4. 私とメキシコ：「日墨協会60年の歴史をさらに前に」                                 | 和久井伸孝 | ...8  |
| 5. メキシコへの誘い：「レフォルマに並ぶ歴史：銅像でたどる偉人案内(第2部-④：最終回)」               | 酒井梢恵  | ...9  |
| 6. お知らせ：懇親ゴルフコンペ ...6 / 活動報告：Fiesta Mexicana 2016 アミーゴ会テント設営 |       | ...6  |
| 7. トピックス：政策金利を4.75%に引き上げ／グアナファト映画祭で最優秀作品賞／あとがき               |       | ...13 |

ち夫婦にはあるのよ」と、首都への期待を膨らませた。侍女コロニツ伯爵夫人は、いつも物静かで無口なカルロッタが、 Cholula のような質素な村に立ち寄った時でも、見るもの触れるもの何でも「ステキ、ステキ」と気に入った様子を人々は好意的に受け止めたようだ、と書き残している。24歳の誕生日を迎えたばかりのカルロッタは、ダイヤモンドのティアラと大粒の真珠のネックレスをつけ、レース飾りの純白のドレスに身を包み、皇帝とともにミラノで特注された馬車に乗り、合計 200 の馬車と 500 の騎馬兵に護衛されて首都に入った。首都ではメキシコの三色旗がはためき、憲法広場（ソカロ）は樹木や花や熱帯植物で埋め尽くされていたという。

### 帝国統治の行き詰まり

このロイヤル・カップルは伝統的なヨーロッパの帝王学を継承しつつも、自由主義的な思想のもとに教育を受けており、それを帝国の統治に反映させようとした。自由主義の根本である平等を重んじ、特に先住民の立場を尊重した。もともと複数のヨーロッパ言語を操るふたりは、メキシコの先住民が話すナワトル語を学び、農民労働法などをナワトル語でも発布した。先住民からの案件を扱う担当部署も構え、彼らの土地や権利を守った。しかし、先住民を帝国軍として組織することには失敗した。そもそもナポレオン 3 世は自国の議会の非難的であったメキシコ駐留経費を削減すべく、フランス軍を撤退させ、マキシミアンにはメキシコ帝国軍の創設を命じていた。しかし、先住民を兵士として組織することは至難の業であった。「敵を見ると、武器を放り出して逃げ出してしまうのよ」と、カルロッタは嘆いている。

軍事基盤のない帝国は、ローマ教皇の支持をも失った。教皇側はあくまでもメキシコでの教会権力の拡大を要求したのに対し、カルロッタは、「メキシコで何が不愉快で、権欲に固執した聖職者なのよ。あの連中こそカトリックの教えに従って再教育しなければ」と悲嘆にくれ、マキシミアンは教会財産の没収、聖職者への給与制の導入、信教の自由を提案した。カルロッタは歩み寄りの場をもうけるが、「教皇大使は聞く耳を持たない、これぞまさしく地獄だわ」と言って、教皇側との交渉決裂を認めている。

帝国の存続には、ナポレオン 3 世と教皇の後ろ盾だけでなく、後継者の選定も必要であった。しかし、マキシミアンとカルロッタには子供がなかった。実は、北部を視察中のマキシミアンに、生まれて間もない先住民の孤児を村人が差し出すという出来事があった。皇帝は赤ん坊に自分の名前を授け、乳母をつけて、宮廷へ呼び寄せる手配をしたが、幸か不幸か、数か月後には赤ん坊は死んでしまった。待たなしの帝国の基盤作りのため、マキシミアンは、初代メキシコ皇帝となった独立戦争の英雄イトゥルビデ將軍の孫で、わずか 2 歳のアグスティンを皇位継承者として迎えた。しかし、イトゥルビデ將

軍が皇族でないことから、その子孫を迎えることにカルロッタが納得せず、アグスティンは母親のもとに戻され、継承者問題は不問に付された。

継承問題が一段落すると、カルロッタはユカタン半島へ視察に出た。メリダの女性たちの美しい民族衣装や舞踊を堪能し、ウシュマルのピラミッドも見学しているが、本当の目的は、ユカタン半島の分離運動の動向を探るためであった。しかし、南の分離と北のフアレス軍の進軍を阻もうとしても、国庫が底をついては策を講じようがなかった。ナポレオン 3 世に会って、帝国の危機を脱する手立てを模索するようにと、皇帝はカルロッタをヨーロッパに送った。「おまえ自身の考えで行動しなさい。ひっ迫した局面では、即決即断だ」と、帝国の運命を皇后に託している。カルロッタは不義の子供を孕んだ身重の身であったが、蒸し暑い船室に横たわり、大西洋を渡ったのである。1866年7月13日のことであった。

### カルロッタの狂気

ヨーロッパに着いたカルロッタは、早速ナポレオン 3 世に資金援助を申し込む。ナポレオン 3 世は病



気を理由に会談を延ばせるだけ延ばした挙句、結局、援助を拒んだ。会談中、飲み物を勧められると、カルロッタは「私を毒殺するつもりか」と怒り狂ったという。フランスに見切りをつけた彼女は、ローマへ向かう。教皇ピオ 9 世が朝食をと

っているところへ踏み込み、テーブルの上のココアに手を突っ込んで、「おなか为空いた、毒が入っているから何も食べられない」と言って、ココアをすすったという。さらに、ナポレオン 3 世の差し金で、従者たちが自分を毒殺しようと言っていると行って暴れ始めた。教皇のそばなら安心だと言って、帰ろうとしなかった。困った教皇は、女人禁制の教皇庁ではあったが、図書館で一夜を過ごすことを許したという。翌朝、カルロッタは、死後すみやかに埋葬するようにと遺書をしたため、マキシミアンには「さようなら。神様が私を呼んでいるのです。幸せをありがとう。神様があなたにご加護と永遠の栄光をもたらさんことを」と宛てた。その後、彼女は祖国ベルギーに連れ戻され、精神病の治療のため幽閉の身となる。

何が彼女を狂わせたのか。主たる原因として、妊娠するために様々な薬草を飲んだことが毒殺の恐怖へと転じたこと、夫婦生活がうまくいかず、子供ができなかったこと、帝王学を授けられながらも統治に失敗したことが挙げられる。

結局、カルロッタが皇后として君臨した期間はわずか 2 年ほどであった。26 歳の誕生日を迎えた直後に、メキシコを後にしている。その後、肺炎で 87 歳の生涯を閉じるまでの約 60 年を狂気のうちに過



ごしたことになる。この間カルロッタは、マキシミアン、ナポレオン3世、フランス軍大佐シャルル・ロイセルに毎日のように何通もの手紙を書いた。しかし、いずれも宛先人に届くことなく、医師たちがカルロッタの症状を分析するための資料となった。手紙の署名は「カルロッタ」が常であったが、1869年には「シャルル」「C.ロイセル」「C.ロイセル大佐」と軍人としての人格で手紙を書いている。夫マキシミアンがメキシコでフアレス軍に銃殺されたことを知ると、イエスの磔刑になぞらえ、夫が復活すると信じていた節も伺える。同時に、彼との間に子供ができなかったことへの恨みも綴られた。妄想は暴走し、ロイセル大佐やナポレオン3世に対して自分

と結婚するようにと迫る手紙さえも書くようになっていった。

晩年はピアノに向かい、メキシコの国歌を弾くこともあったという。そして「神様、私には夫がいまいました。皇帝でした。私たちは素晴らしい夫婦でした。けれども狂気が襲ってきたのです。狂気がすべての結果でした」「神様、あなたが銃殺を画策したのですね。可哀そうなハプスブルグ家のマキシミアン！扇動者ナポレオン3世め！ナポレオン3世の支援があれば！」と繰り返したという。しかし、彼女が狂気のうちに残した手紙や発した言葉の中に、皇后としてあれほど気にかけていた先住民について言及されることは決してなかったのである。 <了>

メキシコ歴史文化講演会 2016：第4回講座「近代」の報告

## フリーダ・カーロ (1907～1954) ～フェミニズム運動に影響を及ぼした国際的画家～

作家・元早稲田大学講師 山本厚子

### はじめに

メキシコは1810年にスペインから独立を達成し、百年後の1910年に世界で初めて革命を起こした。そして、1920年代には、壁画という手段で民衆に文化・教育改革を実施してゆく。

壁画運動の三大巨匠と呼ばれるのは、リベラ、シケイロス、オロスコらである。リベラはヨーロッパに14年滞在して1921年に帰国したので、メキシコの民族主義的な土着の文化を革命に投影しようと試みた。バスコンセロス文化大臣の指導により大統領府、諸省庁の建物、大学にまで、革命と歴史を表現する壁画で埋まっていた。

リベラとフリーダは壁画の作業場で出会い、恋に落ちて結婚する。22歳のフリーダは42歳のディエゴ・リベラの3番目の妻となったのである。

47年間の人生で、フリーダは200点余の「絵画」を描くことで、肉体の苦痛、愛・性・女性の自立・精神の悩み、自らのアイデンティティー・革命・芸術などに対する熱い思いを表現した。最後の静物画である西瓜の絵に、「人生万歳！」と書き加えて、コヨアカンの「青い館」で永眠した。

### 私とフリーダ

私が初めてフリーダの絵と対面したのは、二度目にメキシコを訪問した1972年であった。チャプルテペックの森にある近代美術館の片隅で「二人のフリーダ」を目にした時である。館長のフェルナンド・ガンボア



氏の解説で、「ディエゴと離婚した1939年に描かれた絵」だということを知った。ふたり並んだ女性の心臓が身体から飛出し、白いレースのドレスの女性の方の血管を挟みで切って、血が飛び散っていた。「なんと強烈な絵なのだろう・・・」というのが第一印象であった。「フリーダ・カーロ」という名前は心に刻印された。

しかし、私は壁画家のシケイロスと知り合い、彼の

インタビュー記事を書いたり、メキシコに在住する日系移民たちの足跡を辿って大平洋岸を国境から旅したり、南部のチアパスに移民を派遣した「榎本武揚」などに興味を深め、歳月はあつという間に過ぎてしまった。

そして、2005年、聖教新聞社の依頼で「中南米＝歴史を動かした女性たち」というテーマで、7名の女性を連載することになった。それらは、ミカエラ・バスティーダ（ペルー）、ガブリエラ・ミストラル（チリ）、シキーニャ・ゴンザーガ（ブラジル）、フリーダ・カーロ（メキシコ）、エバ・ペロン（アルゼンチン）、セリア・サンチェス（キューバ）、リゴベルタ・メンチュウ（グアテマラ）たちであった。フリーダとの再会であった。彼女の生まれ育ったコヨアカンの「青い館」について書いていると、街角に咲き乱れていたハカラダの紫の花の香りが思いだされた。

今回、メキシコ・日本アミーゴ会から「2016年メキシコ歴史文化講演会」で、「フリーダ・カーロ」に

ついて話す機会を戴き、喜んで承諾した。私は、日本ジェンダー学会でラテンアメリカ地域の「フェミニズム運動」について話したり、まとめようとしていた。

1920年代に女性党を組織したパナマの弁護士で政治から女性の地位向上を図ろうとした、クララ・ゴンサーレスを調べていると、クララやチリのガブリエラ・ミストラルたちがメキシコを訪れていることがわかった。彼女たちがフリーダと会ったことは容易に想像された。メキシコ人の画家フリーダの生き方は、彼女自身は思ってもいなかったに違いないが、ラ米地域の「フェミニズム運動」に少なからず影響を与えていた。

### フリーダの生涯と作品

フリーダの名前は、正式には「マグダレーナ・カルメン・フリーダ・カーロ・デ・リベラ」という。1907年7月6日、メキシコシティの南部、大学都市に近い静かな住宅地であるコヨアカンで生まれた。

ユダヤ系のハンガリー人の父親ギジェルモ・カーロはドイツからの移民であった。母親はマティルデといい、メキシコの南部オアハカ州の先住民の血をひいていた。マティルデは後妻で、先妻には2人の娘がいた。フリーダは三女で妹がひとりいる。後にフリーダの夫ディエゴと不倫するクリスティーナである。

可愛らしく闊達なフリーダはドイツ人小学校に入学した。しかし、小児麻痺に罹り、彼女の右足は萎えて棒のようになってしまう。6人の娘の中で特に可愛がっていたフリーダの機能回復のために、父親はあらゆるスポーツをやらせた。また、絵画を習わせることにした。

1910年に勃発したメキシコ革命は、20年代に文化改革へと進み、壁画運動が活発になっていた。学問の道は女子にも開かれ国立予科高等学校には、男子生徒2,000名の中に女子が30数名加わった。その中でフリーダは目立つ存在で、医学部を目指していた。初恋の彼も現れ、青春を謳歌していた18歳の時、交通事故に遭う。脊髄と骨盤が3ヶ所、右足が12カ所骨折、鉄のパイプが腹部から子宮を貫通するすざましいものであった。奇跡的に一命は取り留めたが、1年後に痛みが再発し、生涯のうちで30数回の手術を受け、絶えず脊髄と右足の痛みにさいなまれることになった。「肉体の苦痛と死への不安・恐怖」から絵画を描かずにいらなかった心情がよく理解できる。

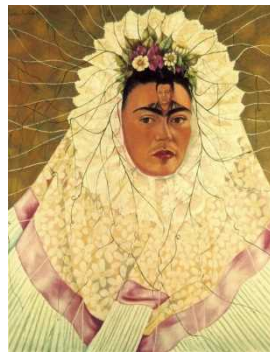
初めての自画像は1926年、初恋の相手への贈りものとして描かれたが、相手に受け取りを拒否される。ワインレッドのベルベットのドレスを着た成熟した女性に描かれている。首はモディリアニの描く人物のようで、一文字に結んだ口元、眉毛は彼女の自画像の特徴である左右が1本に描かれている。

初恋が終わった翌年、文部省の壁に壁画を製作していたディエゴ・リベラと出会ったフリーダは、巨匠への憧れと恋心から急接近する。そして、1929年8月、フリーダは20歳上のディエゴと3人目の妻として結婚した。

ディエゴは、メキシコの北部グアナファト市の出身で、双子のひとりで、もうひとりのカルロスは2歳で亡くなり、母の愛を受けられずに成長する。サン・カルロス美術学校に学び、1907年にヨーロッパに奨学金

を得て留学し、1921年に帰国した。シケイロスの薦めで、二人は壁画運動を広める。

結婚してすぐにフリーダは共産党に入党し、人生の最期まで党员であった。流産を繰り返すフリーダに、夫と妹クリスティーナの不倫が発覚し、彼女の描く絵も自画像の他に「ちょっとした傷」とか、「私と乳母」、「二人のフリーダ」、「絶望」、「水が私にくれたもの」など、愛、性、アイデンティティーを問う生々しいものとなっていった。自画像も、その時々彼女の気持ちを表しているように、淋しげで苦悩に満ちた目つき、心の叫びが聞こえてくるような表情のものもある。1940年に描かれた自画像は、ピカソから贈られたイヤリングをつけて誇らしげな表情で、髪の花飾りも華やかである。



1939年11月に夫からの申し出でふたりは離婚する。しかし、1年後に再婚した。フリーダの健康状態が悪いのを知ってディエゴから再婚を言い出したのだった。フリーダは思うように絵が描けなくなると「奉納画（レタプロ）」や「日記」を夢中で書いた。ディエゴとフリーダの夫婦は、「革命家・芸術家」という点で深く結ばれていたように思える。フリーダが亡くなる前年、1953年に初めてメキシコシティで個展が開催される。写真家のロラ・アルバレス・ブラボが企画したもので、パーティは賑やかであった。フリーダはすでに右足を壊疽で切断しており、ストレッチャーで会場に現れた。

1954年7月13日未明、フリーダ・カーロは永眠した。薬の飲み過ぎだったと言われる。国立芸術院で盛大に葬儀が行われ、ドローレス市営墓地で火葬にされ、遺骨は壺に入れられ「青い館」の2階に祀られた。

### 同時代のひとびと

フリーダが生きた時代、1907年～1954年という期間は国際的に激動の時代だった。日露戦争、メキシコ革命、第一次世界大戦、パナマ運河の開通、ロシア革命、20年代の壁画運動と文化・教育改革、スペイン市民戦争、メキシコの石油国有化、第二次世界大戦、太平洋戦争など、世界史が大きく揺れ動いた。

アメリカ合衆国では、石油産出に伴い自動車や電化製品などの発明により女性の社会進出が顕著になった。しかし、参政権はまだ与えられず、賃金格差、差別待遇などの社会矛盾に対して、フェミニズム運動が始動しはじめる。旗手としてアリス・ポールらが挙げられる。また、スペインの統治に代ってラテンアメリカ地域を支配しようと、アメリカは「米州機構」という組織を創設した。そして、1928年に「女性委員会（C I M）」を作り、地域内の女性の地位向上や生活改善をはかろうとした。

メキシコで文化・教育改革を押し進めていたバスコンセロス文相は、チリで活躍していた詩人・文筆家のガブリエラ・ミストラルに女子用の教科書の執筆を依頼し、メキシコに招いた。彼女は後に領事としてベラクルスに滞在し、ラ米地域内で初めて、ノーベル文学賞を授賞した。世界中の女性たちの先頭に立つ知識人

であった。

パナマ運河開通によりパナマにも革新的な思想がヨーロッパより導入され、弁護士で政治家のクララ・ゴンサーレスは女性党を組織した。同じ頃、アルゼンチンでも女性党が組織され、チリでは女性たちが集団で街頭デモに参加していた。フリーダ・カーロが画家として自立を願って頑張っている時期、広範なラテンアメリカ地域内でフェミニズム運動が台頭していた。

同時代の日本人の女性としては、オペラ歌手の三浦環が挙げられる。ヨーロッパで活躍した彼女は1918年、35歳で南米への巡業に出ている。「蝶々夫人」の作曲家のプッチーニが絶賛する国際的なオペラ歌手である。2,000回の講演を行ったと言われる。もう一人の女性はニューヨークに在住していた、石垣綾子である。夫の石垣栄太郎は、メキシコの壁画家たちと交流があり、彼の作風はメキシコの壁画に影響を受けていたように思える。

彼と親しかつたのが北川民治である。兄を頼って渡米し、ニューヨーク、キューバに約10年滞在した後、彼は1923年にメキシコに辿り着く。リベラが校長をしていたサン・カルロス美術学校に学び、シケイロス、オロスコ、タマヨなどと親交を得た。「壁画運動」に参加した北川は、トラルパン野外美術学校で教え、後にタスコ児童絵画学校の校長を務めた。

そして、1936年に日本に帰国する。翌年、二科展に「タスコの祭日」と他4点を出品し、会員となった。後に、名古屋市東山動物園に美術学校を開設し、また、名古屋東山に児童美術研究所を創設した。フリーダが永眠した翌年、北川はメキシコを再訪問する。日墨の芸術交流に大いに貢献した人物である。

1935年、ニューヨークのグッゲンハイム財団の依頼でメキシコシティにやって来て「アベラルド・ロドリゲス（元大統領）市場」に壁画を描いたのは、イサム・ノグチであった。彼の父は詩人、翻訳家、大学教授の野口米次郎で、母は米国人のレオニー・ギルモアという。

フリーダとイサムは偶然に出会い、熱烈な恋に落ちる。一緒に暮らそうとしたようであるが、夫のディエゴの知るところとなり、ピストルで脅かされた。イサムから贈られた蝶々の標本は今も青い館に保存されている。イサムはレリーフ彫刻「メキシコの歴史（戦争）」を製作し、日本の西芳寺や天龍寺の石組みの庭園に影響され、彫刻家として国際的に名声を得た。

ロシア革命の勇士であったレオン・トロッキーはメキシコに亡命し、暗殺された。タンピコ港に出迎えたのはフリーダで、世界革命を説いたトロッキーは当初「青の館」に住んでいた。フリーダは彼に贈るために正装した自分の姿を描いた。ハンガリー出身の写真家はフリーダの写真集を出版している。

国際的に有名な人びとがフリーダの周りを華やかに取り囲んでいた。

## 日本のフリーダ

フリーダが他界した1954年、「日墨文化協定」が締結され、その翌年、駐日メキシコ大使、マヌエル・マプレス・マルセと外務大臣、重光葵によって批准書が交換された。ルイス・マルティネス大統領の時である。

日墨文化交流第一歩の記念として、1955年9月、東

京国立博物館において「メキシコ大美術展」が開催された。壁画の巨匠たちの作品に交じって、フリーダの「いつも私の心にいるディエゴ」（1943年）と数点の静物画が出品され、初めて日本で彼女の名前が知られることとなった。

そして、1975年メキシコシティで、国連主導により「第一回国際婦人会議」が開催された。女性問題に関する国際的ターニング・ポイントである。日本ではそれから10年目に「男女雇用機会均等法」が批准された。この会議は、コペンハーゲン、ナイロビ、北京に引き継がれてゆく。ドイツのフェミニスタたちが「フリーダ」の生き方をジェンダーの視点から取り上げた。

ディエゴと再婚する条件として、フリーダが「自分の作品の売り上げで自活すること、家計の半分を払うこと、性的交わりを持たないこと」の3点を挙げ、自立した生き方を望んだことがフェミニストたちの共感を得た。

日本では、美術関係者たちがフリーダの200点に及ぶ絵画に注目し、その強烈さに圧倒された批評を述べ、TV番組にも登場するようになった。しかし、一般女性が「フリーダ・カーロ」の存在を知るのは、メキシコ映画（1984年、主演はオフエリア・メディーナ）と米国映画（2002年、主演はサマル・ハエック）の2本の映画を通してであった。

また、1989年に名古屋市美術館で開催された「メキシコ・ルネッサンス展」や2003年にサントリー美術館、名古屋市美術館、高知県立美術館で開催された「フリーダとその時代」という展覧会の開催により、地方の人びとにも「フリーダ・カーロ」という国際的なメキシコ人画家の存在と、その生き方が話題にされるようになったのである。

名古屋市美術館は、建築家、黒川紀章の設計である。すでに述べたメキシコ壁画グループの一員であるような、北川民治が東山動物園に美術学校を創設したり、東山美術研究所を開設したからか、名古屋の人びとはメキシコの芸術に関心が深いように感じる。フリーダの「仮面をつけた少女」とリベラの「革命家たち」の絵画を名古屋市美術館は所蔵している。

また、高知の人びとも歴史的にメキシコに関心をもっている。日墨交流の原点が高知にあることはあまり知られていない。

それは、秀吉の時代に「ヌエバ・エスパーニャ」の商船、「サン・フェリペ号」が土佐の浦戸の海岸に漂着したことに始まる。船が所蔵していた財宝を没収した秀吉は、フランシスコ会士の若いメキシコ人、フェリペ・デ・ヘススを捉え、26名を長崎まで引き回して磔の刑に処した。「長崎の二六聖人」の話である。

1596年のことで、船から没収した「地図」は、高知県立図書館に保管されている。乗客200数十名は土佐に半年間滞在して現地の人びとと交流したという歴史がある。「セビチェ」のような「鯉の叩き」の食べ方は、メキシコ人が現地の人びとに教えた文化交流のひとつと言えよう。

「八金」という呼ばれる働き者で芯の強い土佐の女性たちに、メキシコ人画家、フリーダ・カーロの強烈な人生の表現である絵画が、共感を持って見られたに違いない。



## おわりに

2015年の夏、「織るように」という、フリーダの遺品を撮影したドキュメンタリー映画をメキシコ大使館の「エスパシオ・メヒカーノ」で鑑賞した。カメラマンの石内都氏の講演も聴いた。残念ながら、私の納得のいく作品ではなかった。

そして、今回フリーダ・カーロについて話す機会を頂いて、私は幸せであった。「フリーダの画集が欲しい！」と講演会の準備をしながら思った。そこで、期待もせずに私は神保町の古本屋街に出かけてみた。すると、奇跡のように2軒目の古本屋で「フリーダ・カーロ」という分厚い画集を入手することが出来たのである。不思議な気がする。

ドイツ人、エルザ・プリグニッツ・ポータ著のドイツ語から英語に翻訳された本であった。彼女の長年にわたるフリーダ研究はすばらしく、拍手を送りたかった。著者のあとがきを読んで驚かされた。それは、「メキシコシティの近代美術館で館長のフェルナンド・ガンボア氏から「二人のフリーダ」を紹介され、フリーダに興味を持つきっかけとなった」と書かれていたからである。私が近代美術館を訪れたと同じ頃、彼女も「二人のフリーダ」を見ていたのであった。

「エルザがイタリアで講演をしている！」と友人か

ら情報が入った。スマホの「ユーチューブ」を通じて、ベローナでのエルザの講演を聴くことが出来た。さらに画面に写しだされたのは、エルザの他にメキシコの文化大臣と元駐日メキシコ大使のルイス・ミゲル・カバーニャス氏の姿であった。

「マヌエル・アルバレス・ブラボ写真展」のご招待状をメキシコ大使館から頂いたのは講演会の直前であった。世田谷美術館で開催されるイベントで、オープニングの会にはカルロス・アルマーダ駐日メキシコ大使やアレハンドロ・バサーニェス文化担当官、アウレリオ・アルバレス・ウルバフテル氏（アルバレス・ブラボの3人目の妻の娘）などが参列していた。

フリーダ・カーロの個展や回顧展を実現し、最後の写真を撮した「ロラ・アルバレル・ブラボ」という人物が、マヌエルの最初の妻であることを私は会場で初めて知った。売店にはフリーダの肖像の絵葉書が売られていた。

広い会場にリベラ、シケイロ、トロッキーらのポートレートに交じって、素顔のフリーダの写真があった。「¡Viva La Vida! (人生万歳)」。人生最後の静物画に書かれた言葉が、突然耳の奥で聞こえた。

「フリーダ、安らかに！」心の中で私はつぶやいた。

<了>

[編集部注：メキシコ歴史文化講演会 2016は「メキシコの歴史で活躍した女性たち」を共通テーマに5人の女性を取り上げ、各時代の専門家である5人の女性講師に時代背景を含めて解説をお願いしました。本号では第3回(6月24日)、第4回(7月29日)の講師のご寄稿を掲載します。第5回(8月31日)は次号掲載予定です。お楽しみに。なお、第1回(4月6日)と第2回(5月12日)は前号2016年7月号に掲載しました。また、掲載図版はインターネットで公開されている図版をママ転載しました。]

### お知らせ

#### メキシコ・日本アミーゴ会 親睦ゴルフコンペ

日時：2016年11月1日(火) 7時40分現地集合  
場所：本厚木カンツリークラブ

(<http://homepagel.nifty.com/hon-atugi-cc/>)

スタート時間：IN コース 8時4分から8分間隔

最大受入人数：6組24名/最小組数5組20名  
先着24名

プレー費用：17,850円(70歳以上1,000引き)

参加費：1,500円

(費用はキャディ費含む)

(飲食・売店費用は個人負担)

競技方法：ストロークプレー・新ペリア方式  
(上限ダブルパー)

申込方法：メール又は電話にて下記幹事まで

申込期限：2016年10月25日厳守

(参加者名簿提出期限)

申込・照会先：[info@mex-jpn-amigo.org](mailto:info@mex-jpn-amigo.org)

[コンペ幹事]

鴻巣勝明：[katsuaki4989@yahoo.co.jp](mailto:katsuaki4989@yahoo.co.jp)

携帯 080-1294-5301

南郷茂伸：[mochi641n@yahoo.co.jp](mailto:mochi641n@yahoo.co.jp)

携帯 090-8588-7319

### 活動報告

#### Fiesta Mexicana 2016@お台場 “アミーゴ・テント”を初設置

第17回 Fiesta Mexicana 2016 in お台場が9月17～19日に開催され盛況のうちに無事終了しました(開催報告は次号掲載予定)。

メキシコ・日本アミーゴ会は初めて、会員の皆さまの出会いと交流の場として独自の“アミーゴ・テント”を設営しました。初日17日の開会式後にはアルマーダ大使夫妻がアミーゴ・テントを訪れ、上原会長としばし歓談されました。



## メキシコイベントは1日にしてならず!?

会員 エバーラスティング代表 蔵野佳好子

## Fiesta Mexicana 大阪が盛り

「フィエスタ・メヒカナ大阪」は9月9～11日に開催され、今年で20周年を迎えました。このようなイベントが20年も続くことは素晴らしいことだと思います。積水という会社の力ももちろん大きいと思いますが、それを支えてきた実行委員の皆さんやボランティアの皆さんの力があってこそ、続いてきたものであると思います。



大阪の良いなと思う点は、立ち上げ時に関わった方たちが今でもこのイベントを訪れ楽しめているところです。9日の夜にも立ち上げの功労者の一人であるロペス氏がサプライズで会場を訪れており、当時のことを振り返って思い出話をたくさん伺うことができました。最初のきっかけは、ビアサミットを同じ場所で開催したことで、その時にメキシコ音楽などで盛り上がり、単独でメキシコのイベントをやってもウケるのではないかと思いついたのが始まりだそうです。その後、帆船のお祭りでメキシコ帆船が大阪港を訪れた時に手伝ってくれたボランティアたちもぜひ、メキシコのイベントをお手伝いしたいと集まり、そうした力がどんどん結集して開催に結びついたそうです。

## Fiesta Mexicana 東京を立ち上げ

私は、今年17回目を迎えたお台場での「フィエスタ・メヒカーナ東京」の立ち上げに関わらせて頂きましたが、きっかけは臨海副都心まちづくり協議会と仕事で関係していたことでした。まちづくり協議会は地域の町内会のようなもので、臨海副都心をとりまとめる事務局です。そこへ帆足まり子氏、石井あけみ氏、当時メキシコ大使館文化担当官であったゴンサレス氏が飛び込み、「メキシコ独立記念日のイベントをぜひお台場でやらせて下さい!」とかけあったそうです。

当時は世界都市博が頓挫して、お台場・有明地区はなんとなく停滞ムードな時代でした。幸運なことに、当時のまち協事務局長さんは東京都のお役人出身にも関わらずフレキシブルで発想豊かな御仁で、ちょっと変わった方でした。突然の申し出に面食らったもの、お三方の情熱に押されてなんとか開催できないものかと非常に智恵を搾ってくださいました。その際に私に電話がかかってきて、「今、目の前に3人のメキシコ(関連?)の方が来ているが、すごい情熱でイベントをしたいと言っている。ちょっと来て手伝ってくれ。時間も無いから」。そう言われて、翌日伺い、お三方にお会いしました。お三方は怒濤の如くメキシコの魅力を話され、大阪にフィエスタ・メヒカナがあるのに東京にないのはおかしいんだ!、とにかく実行委員会に来て話を聞いてくれと言われました。日を変えて実行委員会を訪れると、そこには30年来メキシコと共に生きてきたというような方々数十人がずらりと並び、その日からイベント開催日まで、本当に色々な方たちからダイブなメキシコのお話を聞かせて頂きました。

とにかくどの方もすごい情熱で、メキシコのことを

全く知らない私にもなんだか、このイベントは日本でやった方が良いのではないかと思わせるまでの迫力がありました。もちろん、イベント屋として、一つの国のこういったイベントの立ち上げに関われる嬉しさや興味もありました。ただ、なんといっても時間がない。正味2ヵ月と2週間でスポンサー集めからスタート。当時オープン直後のアクアシティにも参画して頂けるようまち協事務局長さんがお話して下さり、アクアアリーナにステージを設置して外と中とで開催しました。スポンサーもなんとか十数社集まりました(この時は多くの航空会社が協力してくれました)が、会場としても前例がなかった為、条件も二転三転。そのせいでアシが出たりもしました。しかも当日は台風も来ましたが中止になることはなく、なんとか次につながるイベントになりました。それがもう今年で17回。本当に感慨深いです。

## メキシコイベントを仕掛ける

私はその後会社を設立し、横浜でのモダンメキシコをテーマにアレグリア・デ・メヒコ、青山でのMEXICAN WEEK、代々木と駒沢でのCinco de Mayo



とDia de Muertos Tokyo、そして今年5月には代々木公園でのLatin Spirits~Cinco de Mayo~と、数多くのメキシコイベントのプロデュースを手掛けさせて頂くまでになりました。2000年にはメキシコのことを何も知らなかった私が、こうして自らがプロデュースできるようになったのは、メキシコ関連の方たちから大きなアドバイスを頂いたことと、メキシコ人の方たちのサポートがあったからに他なりません。

今年10月にはメキシコの新ポータルサイト「PRメキシコ」もオープンします。このサイトのコンセプトは「メキシコ人発信のメキシコ情報サイト」です。メキシコ人から日本人へのおすすめメキシコ情報を中心にお届けしたいと思っています。

私の会社エバーラスティングは、このようなメキシコをテーマとした事業に来日・在日しているメキシコ人たちにも積極的に参加してもらいたいと考えています。その中で日本とメキシコの文化や仕事のやり方の違い、似ているところ、コラボすればうまくいくところを実際の経験から体感してもらいたいと思います。私にとってもこの経験は人生における大きな宝もの財産です。

私のような若輩者でも手掛けたことがもう20年に達するのだなあと、諸先輩方を差し置いて大変僥越ではありますが、感慨深く思いましたので今回寄稿させて頂きました。今後も頑張りますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します!

&lt;了&gt;





## 時代は変わった... 日墨協会 60年の歴史を更に前へ

日墨協会 会長 和久井 伸孝

### 日墨協会のメキシコ社会での位置づけ

日系社会はじめメキシコ社会、庶民に愛され続ける私どもの日墨協会は人間であれば還暦を迎える事が出来た。これも偏にご先祖さま、大先輩の方々の血と、涙と、努力と、団結と、日本人としての誇りを抱き続けた歴史があったればこそであり、彼ら精鋭の残した精霊とともに協会は、日墨両国の歴史を綴り観察してきた生き証人であり、何万、何十万の方々をお迎して来ました。

日墨協会という日系社会の重鎮、お年寄りの場所であり、全てが金持ちの寄付に依って運営が進められてきたこともあり、以前は協会自体が何組、何組で分断した戦後の派閥時代もあった。時代の流れと変化とともに、協会の有るべき姿も目的もまた変わり、2世、3世、4世の意識自体が完全に変わってしまった。日本人が寄りあう場であり、仲間や日本の情報が集まる場であった。しかし、そうした過去の姿も、他の国々の協会、クラブと比べると相当異なる。

メキシコには日本を代表する日墨協会のほか、スペイン、フランス、レバノン、ドイツ等様々な協会なりクラブが古くから存在しており、スペインなどは本国の各州で組織を運営しておるものも少なくはありません。日墨協会と他の協会との大きな違いは、他国の協会なりクラブは会員であるか非会員であるかで非常に閉鎖的且つ差別的な対応をされているのが顕著です。ある意味協会なりクラブに所属することが社会的ステータスを意味すると同時に、スペインの協会の一部ではスペイン人であるという血統の保証がない限り会員になれない程の会員規格をとるクラブもある。正直これには、何処の団体、組織でも区別はあっても差別を明記させるとは驚きである。

### 定款の現代化：新しい時代を生きる

昨年来から社団法人・日墨協会の定款改定を進め、今の世に適合させる為に修正、訂正を致しました。協会の目的の中に、第2条には「芸術、知性、教育、社会、科学、技術的な文化要素だけでなく、伝統的な活動を含めた社会における生活向上と改善の分野に関する知識を深めるようなメキシコと日本の文化を推進する」と記し、また第3条には「権利、自由、平等の行使を制限したり、人々の完全な成長、国の文化、社会、経済生活への有効な参加を妨げるようなあらゆる差別を阻止、撲滅する人権尊重を含めた、メキシコと日本の文化、音楽、芸術、演劇、舞踊、文学、文芸、建築、映画を振興、普及、推進する」等と記すなど、協会の定款には区別や差別を感じさせる文面は記載されていない。会員の方々のための施設、運営は当然としても、日墨協会はメキシコ社会にあって日本を代表する迎賓館的な場を提供し、組織的にも、目的においても、両国交流の重要な役目を担ってきたし、今後もその役を負うのは当然のことである。今まで以上に会員の方々のみならずメキシコ庶民に開かれた存在へと変わりつつある。

ただ時代とともに日本文化ひとつとっても多様化している。顕著な例として昨今協会恒例行事である春祭り(子供の日)、夏祭り、秋祭り等三大お祭りにも、メキシコの若者の多くは伝統的なお茶セレモニー、お花、武道に収まらず、J-POP、アニメ、漫画、日本食、日本語勉強などのファンが溢れんばかりに集まり、一日で一万近い来場者を数えるまでになった。今までの日本文化イメージから徐々に変化している。読めない日本語の古本がメキシコの若者達へ飛ぶように売れてゆく現象、週末のメキシコ人若者の結婚式の場として日本庭園、大広間の会場を予約するなど、有難さ以上にメキシコ社会の日本に対する観方が大きく変わりつつあると同時に、彼らの日本文化に対する抵抗がなくなって受け入れられているのが今どきの現象である。

今後は日墨協会という名称に基づくように、建物、形で来館者をお迎えする迎賓館的役目のハードの姿と、また国籍に隔たりなく会員として協会の総合的施設を利用されるごく普通のメキシコ人に門戸を開いてゆく交流の場としてのソフトの道とを求めて行く方向性を模索している。

協会の魅力や求めるものは昔とは全く異なる。日系の成功者、金持ちが全て寄付によって賄っていた時代のように、協会は公共性高いものであるから利益追求よりも慈善活動が中心であるべきだと表の面だけで存在価値を高める時代は終わった。同時に情報も人も、日系炉端会議的な場には日系の若者達も含めて集まってはこない。過去の方法で日系社会を纏め上げるべき時代は終わり、新しい姿でしか維持できず、未来の形も見えて来ない。我々執行部の今一番の課題は先祖日系の方々が残された膨大な有形、無形の財産を如何様に維持するか、その為の資金運営を如何様に生み出すかであり、表向きの文化、教育、平和を唱えるのは美しいが、その裏には経済的財政的基盤があつてのことであり、協会運営に関わる莫大な費用を稼ぎ出す方法を模索しているのが現実である。

### 「時は待たず理想から形へ」

#### 日墨協会の改革事業取り組み

形は協会であっても実体は営利団体。株式会社の頭脳感覚と行動とをもって取り組むとの方針のもと、私ども新執行部は受け継いでより早一年半が経過しました。非常に恵まれた知恵と実践の理事スタッフに支えられて、「中興の祖」の気概で改革に次ぐ改革を目標



として下記のように取り組んで参りました。

①日墨協会定款の改定。20 数年前から一度も改訂してない定款、所謂協会の憲法を全面的に改定すると同時に総会で承認発効。

②財政改革。金が足りない、資金が無い、支払が困難である等々、何年にも亘って繰り返してきた課題に先ず取り組み、赤字部門も黒字化。協会誌発行、日本語教室、レストラン、宴会場の経営立て直し。一般会員とは差別化を図ったプラチナ会員制度の導入。協会創立 60 周年記念年なので通常より倍以上の特別イベントを企画催行し、過去になかった収入倍増を達成。

③人事改革。職員社員の意識改革と同時に改革反対職員を解雇。

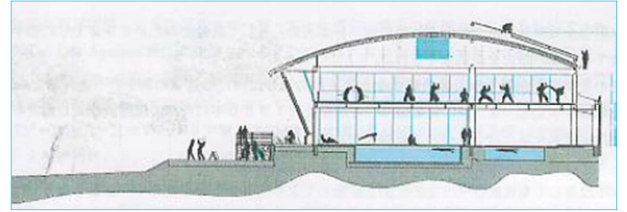
当然、改革は道半ばである。また当然反発も生じる。併し確実に進んでいる。

### 移民資料館とスポーツセンターの建設

今後最大の事業計画は、協会による一大スポーツセンターと移民資料館の建設である。ブラジルよりも古く、榎本移民団がメキシコ・チャパスに入植して来年で 120 年の佳節を迎える。移民資料館はその意義も込めて、日系社会大物春日氏の援助もあり、既に建設改造は進み 10 月 15 日に仮開館式が行われる。最終的には来年に正式オープニングを予定している。

尚、スポーツセンターは 2 階建て建設面積 1,800 平米、予算計画総工費約 4 億円。日本側とメキシコ側でそれぞれ半分の 2 億円を集める大計画である。

屋内プールと道場の建設によって日墨協会も初めて



他の国の協会クラブより一歩施設内容も充実させ、安定した会員の数と収入を確保し、本来の協会が目的とする文武両道の文化発信の場、会員はじめ日系人が誇りに思える場、メキシコ人が会員になりたくなる場、日本の心と形が届けられる場を提供できるものと確信している。それが長きにわたり日系社会の為に闘い、尊い努力と遺産を我々に残された方々への恩返しであり、我々の後から続く子孫にしてやれる日本人としての誇りと責任であると信じている。 <了>

【編集部注：日墨協会創立 60 周年記念事業募金計画の詳細は決まり次第アミーゴ会員にもお知らせします。募金対象事業は本文にもある通り、移民資料館(工費 10 万 US ドル)とスポーツセンター(同 400 万 US ドル)の施設建設。募金目標額はメキシコ側と日本側で折半を予定。なお、日墨協会のブログは <http://amj2012.blog.fc2.com/>、同フェースブックは <https://www.facebook.com/amjapon?fref=ts> です。フォロー願います。】

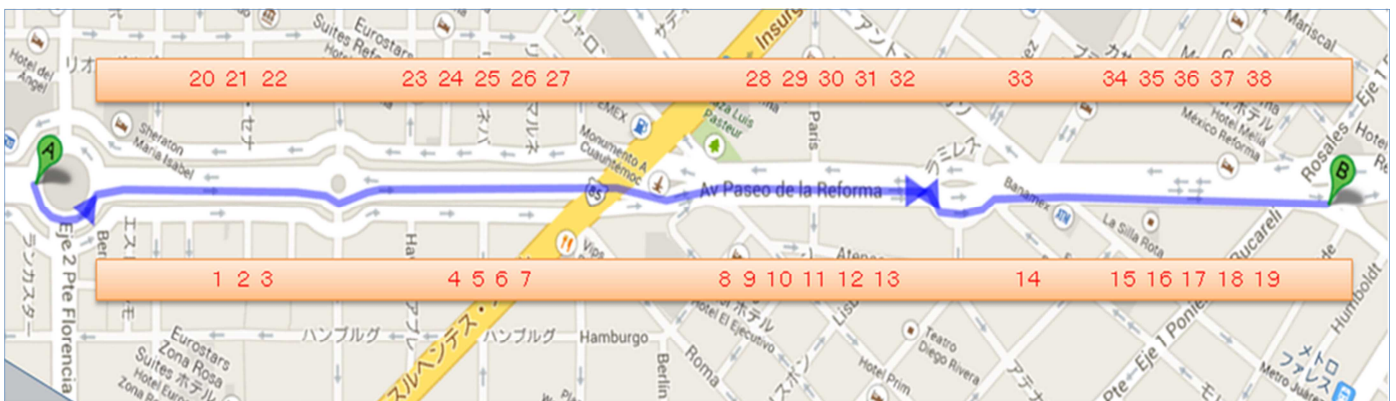


### メキシコへの誘い

## レフォルマに並ぶ歴史 ～銅像でたどるメキシコ偉人案内～ (第 2 部-④)：完結編

前メキシコ観光(メキシコ) 酒井梢恵

【編集部注：「レフォルマに並ぶ歴史～銅像でたどるメキシコ偉人案内」は本誌第 16 号(2013 年 10 月)より連載が始まり、通常の旅行ガイドでは読めない内容で大好評でしたが、残念ながら連載第 7 回(第 22 号 2015 年 4 月)で最終回を迎えました。しかし、会員読者から連載再開の熱い要望が多数編集部に寄せられ、筆者の酒井梢恵さんにご無理をお願いしたところ「第 2 部」として再び連載することができるようになりました。しかしながら、それも今回で完結し文字通りの最終回となりました。なお、酒井さんは 2015 年 6 月にメキシコ観光を退社し日本で新しい生活を始めておられます。ご多忙の中ご寄稿いただいたこれまでのご協力に対して改めて心よりお礼を申し上げます。有り難うございました。】



### DON FRANCISCO PRIMO DE VERDAD (地図中 25)

1760 年 6 月 9 日、現在のハリスコ州の荘園 LA PURISIMA CONCEPCION に生まれた。この土地は現在はハリスコ州に属するが、当時はアグアスカリエンテス州の管轄にあった。

1784 年、メキシコシティの王立神学校 SAN ILDEFONSO

で、弁護士の勉強を始めるが、本国出身の学生からのクリオージョ(両親は本国生まれのスペイン人で、本人はメキシコで生まれた人々)に対する差別に苦しんだ。

その後、王立裁判所の弁護士になり、傑出した才能をみせた。後にメキシコシティの市議会代表をも任せられた。



この頃、本国スペインはナポレオン1世率いるフランス軍の侵略に遇い、スペイン王室はその座を退かなければならない事態となっていた。1808年7月15日、彼は既に人々の指示を失い、権威が失墜しつつあった、副王(君主国スペイン国王の代理として植民地を統治するものの称号) **Iturrigaray** に対し、本国スペインの支配から独立した臨時政府の樹立のため、メキシコ以外の全州の

議会代表を集めるよう提案した。

1808年8月9日、各州の議会の代表や大司教、裁判官や異端審問調査官の他、一部の上流階級の人々など、総勢82人の異なる立場の人々が一同に会し会議がもたれた。まず副王が開会を宣言し、次に彼に提言を述べるよう指示をした。彼は「ヌエバ・エスパーニャ(独立前のメキシコの呼称)において、人々が口に出すことを憚っておりますが、人々は住民が主権をもった国で暮らすことを望んでいるのです」と臨時政府樹立の目的を唱えた。

この出来事を知った本国は、メキシコ生まれのクリオージョの主権を求める動きを封じようと、ただちに **Gabriel Yarmog** が率いる一団をメキシコに送り込んだ。それに呼応して1808年9月15日、クリオージョ側は副王 **Iturrigaray** を捕らえ監獄へ送った。その後任として **Pedro Garibay** が副王の地位に就いた。しかし、その報復としてクリオージョ側の中心人物たちが続々と捕らえられた。彼自身も例外ではなく、捕らえられた後、大司教区内の刑務所の独房に収監された。

そして1808年10月4日、その独房で彼は息を引き取った。なんと収監された翌日のことであった。その死因は現在でも明らかになっておらず、諸説存在する。看守による暴力によるというもの、または独房の中で絞殺もしくは毒殺されたのではという説がある。彼の熱い思いは引き継がれ、独立戦争が始まったのは、その死の2年後であった。

## DON MIGUEL LERDO DE TEJADA

(地図中 18)



1812年9月16日、ベラクルス州の港町Veracruzに生まれ、レフォルマ戦争(1857~1861)の時代に活躍した自由主義の政治家であり、経済学者である。

1855年、自由主義者 **Ignacio Comonfort** は **Santa Ana** の独裁を破り、大統領に就任した。大統領 **Confort** は、その思想をもってレフォルマ戦争を巻き起こした。

**Miguel Lerdo** はその政権下で大蔵大臣を務めており、大統

領 **Confort** の考えに賛同し、1856年6月25日「レルド法」を制定した。この法律は、都市部も農村部も関係なく、法人や教会勢力による土地の私有財産化を禁止し、国家への返還を要求するものであった。レフォルマ戦争期に自由主義者たちによって制定された、数々のレフォルマ(改革)法のひとつであった。

しかし、徐々に彼と大統領は政治的に対立する場面も目立ち始め、1856年12月19日には大蔵大臣を辞任した。それでも彼の自由主義を追い求める気持ちは絶えることなく、レフォルマ戦争終盤から、ベニート・フアレス政権下において再び政府のもとで働き、自由主義社会の樹立に向けて戦いを続けた。レフォルマ戦争で自由主義側が勝利を収めてからは、1861年3月22日の死を迎える瞬間まで、最高裁判所の裁判長としての職務を全うした。

## DON ANTONIO ROSALES

(地図中 4)



1822年7月11日、サカテカス州の **Juchipila** に生まれ、新聞記者・詩人・軍人として活躍した人物である。若い頃は、グアダラハラの神学校で学問を修めた後、新聞記者・詩人として活動していた。

1846年、メキシコは米墨戦争(1846~1848年)の真っ只中であり、24歳の彼も時勢に押され王国軍衛兵に志願した。そしてこの戦争における

モンテレイでの戦いに戦士として参加した。

1851年にグアダラハラに戻ってからは、小さな新聞社を起こしたが、当時としては自由主義的傾向が強く、周囲から批判を受けたり、刑務所へ送られることもあった。1856~1857年には、シナロア州クリアカンの大手新聞社の編集者として働いた。その数年後には内務大臣に任命され、1857年には軍において大佐の地位を与えられた。

このように様々な分野において才覚を発揮した彼がその人生で最も輝いたのは、フランス干渉戦争(1861~1867。2014年4月号参照)中の1864年のことであった。太平洋から攻め入ろうとしていた **La Normand** 少佐率いるフランス艦隊を洋上で足止めし上陸を阻止した。また同年、クリアカン近くの **Altata** 港に上陸してきた **Gazielle** 少佐率いるフランスの侵略軍を400人にも満たない部隊で撃退し、少佐を捕虜として捕らえた。その戦いにおける敵軍は800人以上であり、**Antonio Rosales** の軍は倍以上の敵を相手に勝利を収めたのであった。この戦いは「**San Pedro** の戦い」として知られている。

こうして彼はクリアカンの街をフランス軍から防衛した。サカテカス州出身の彼の銅像がシナロア州から贈呈されたのは、この活躍が理由である。

彼は後に先住民出身初の大統領ベニート・フアレス



から将軍の地位を授かり、1865年までシナロア州知事としての任期を全うした。その人生と政治活動の終わりは1865年9月23日、ソノラ州のアラモ Alamos で起こった、アメリカの侵略に対する防衛戦でのことであつた。

現在、彼の遺体はメキシコシティのドローレス墓地にメキシコの英雄たちと並んで眠っている。

## DON PONCIANO ARRIGA

(地図中 12)



1811年11月18日、サンルイスポトシ州に生まれた。

幼い頃から勉学において類稀な才能を見せ、弱冠20歳にして弁護士の資格を得た。この若さでの資格の授与は特例であつた。

その後の彼の経歴は目まぐるしく、当時のサンルイスポトシ州の州知事の秘書官から始まり、市議員・立法議会議員・

政府秘書官・自由党党首と政界の役職を歴任した。市議員に関しては1843年に始めて当選し、1846年に再選を果たした。彼の政界での活躍は、どの分野においても傑出したものであつた。一方で米墨戦争(1846~1848)中の1847年、彼はメキシコ軍の一員として、アメリカからの侵略軍と戦つた。

1852年には大統領 Mariano Arista 率いる自由主義政権のもと、司法大臣に任命された。彼の自由主義思想の目覚めは、この時であつた。1853年、大統領 Arista は保守派の反乱に遇い辞職に追い込まれた。その後任となつたのが「終身独裁官」を自称する、保守派の大統領 Santa Ana であつた(計11回の大統領任期の内、最期の任期)。Ponciano Arriaga をはじめとする自由主義者らは1854年の大統領権限を剥奪する「アユトラの陰謀」を経て、1855年に大統領 Santa Ana を退任に追いやり、その後、約20年に渡つてアメリカへ国外追放した。Santa Ana がメキシコの地で再び暮らしたのは、その晩年2年間だけであつた。

その後、再び自由主義派の Juan Alvarez が大統領に就任し、自由主義社会の実現に向けて議会を召集した。そこには選抜された7つの州(ゲレロ州、ハリスコ州、プエブラ州、サンルイスポトシ州、サカテカス州、メキシコ州、メキシコ連邦区)の代表が集い、Ponciano Arriaga が参加議員の代表に選ばれた。

続く1856年2月14日には、自由主義憲法制定のための憲法制定議会の議長に満場一致で選出された。そして1856年2月18日から1857年2月5日の間、その知識と才能を以て、憲法編纂委員会の委員長の役目を全うした。この頃が彼が人生で最も輝いていた時期と言えよう。こうした活躍があり、現在彼は「1857年憲法の父」として知られている。

志を高く保ち、弱い者のため、正義のために戦い続けた彼の人生は、1865年7月12日、故郷サンルイス

ポトシにて幕を閉じた。現在、彼の遺体はメキシコシティのドローレス墓地で歴史上の人物たちと共に眠っている。またメキシコ立法議会の榮譽の壁に彼の名が金文字で刻まれている。

## DON JOSE MANUEL OJINAGA CASTANEDA

(地図中 27)



1833年4月8日、チワワ州 LA CRUZ の荘園 LAS GARZAS で生まれた。地元の町で初等教育を受けながら、母子家庭で育つた。1850年代の終わりには州都のチワワに拠点を移し、大蔵省の写字生の仕事を心得、その傍ら神学校で科学と文学の勉強を続けた。

その後、メキシコシティの鉱業専門学校に通つた。そこでクリオーリョ(両親はスペイン生まれで、本人

はメキシコ生まれの人々)であつた彼は、その抜きん出た熱意や才能により、本国生まれの級友たちから妬まれ不自由な時間を過ごした。しかし彼はそうした圧力に屈することなく学問を修め、測量士・鉱山技師・品質検査士の資格を得たのであつた。

その後、メキシコシティで得た技術を活かすためチワワ州 PARRAL へ戻り、鉱山技師としての仕事に従事するが、間もなくしてその業績が認められ、チワワ州の第2期立法議会の議員に選出された。

そして時代はフランス干渉戦争(1861~1867)に突入する。その流れで彼は1864年に自由主義軍に入隊し、チワワ第一部隊の中佐を任ぜられ、それから間もなくして同部隊の大隊長へと昇格した。そして彼の率いる部隊は旅団と合流しドゥランゴ州へ進軍した。同年9月21日、荘園 MAJOMA で自由主義の達成を求めて戦つた。彼の軍は勇敢にも銃剣を持ってフランス軍に突撃し、フランス軍の侵略の阻止に一役買ったのである。

この活躍もあり1865年に彼は大佐に昇進した。さらに同年には時の大統領ベニート・フアレスによって、旅団の将軍の地位を授かり、同時にチワワ州の軍事司令官に任命された。

大統領ベニート・フアレスとその大臣たちがフランス軍を後ろ盾にした保守派によって退任させられてから、チワワ州はフランス軍の侵攻により切迫した状況に陥っていた。その状況下で José Manuel Ojinaga は敵軍の注意を逸らそうと、チワワ州西部 GUERRERO への撤退を地元の有力者たちと選択した。困難を乗り越えてようやく GUERRERO の町へ到着した一行は、周辺の町々が保守派によって脅かされているとの情報を得た。

それを知つた彼らは、残っている70人にも満たない少ない戦力を再編成し、状況を打開するために更なる進軍を試みた。道中 ARISIACHI という町で野営することになったが、既に一行の大部分は士気喪失状態となつていた。そうした中、不運にも保守派の団団により一行は捕らえられてしまった。

保守主義派は José Manuel Ojínaga に対し降伏を勧めるが、彼はその申し出を断固として拒否しピストルを取り出し発砲した。その瞬間 3 名の敵兵士が命を落とした。そこに敵軍の中尉が到着し、銃弾を 1 発、彼の腹部目がけて撃ち放った。その 2 時間半後、彼はその命を引き取った。1865 年 9 月 2 日のことであった。大統領ベニート・フアレスは、彼の献身的な戦いを評価し北部の駐屯地に彼の名を冠した「VILLA DE OJINAGA」という名前をつけた。

## FRAY SERVANDO TERESA DE MIER

(地図中 14)



1763 年 10 月 18 日、ヌエボレオン州の MONTERREY に生まれた修道士であり政治家である。幼い頃からドミニコ修道院に入り、16 歳でドミニコ会に入信した。その後、メキシコシティの神学校 PORTA COELI にて哲学と神学を専攻し、その知識を活かして人々への説教も担った。1790 年に卒業後、さらに勉学に励むために神学校 SANTO DOMINGO に入学した。

1794 年、一躍彼を有名にした説教をおこなった。それは、メキシコの「褐色の聖母グアダルーペ」の出現を疑うという、当時としては非常に大胆な内容であった。

彼の思想は時の大司教により認可されず、終には破門され、刑務所へ送られることとなった。同時に彼の文書や書物は、没収された。

その後 1795 年、スペイン南部の CADIZ に追放となり、そこでも彼は修道院の 1 室に閉じ込められることとなった。その長い困難な期間を経て、マドリッドにて 3 人の徳の高い神学者による無罪判決を勝ち取った。

しかし、スペインにおいて彼の困難や逆境が軽減されることはなく、彼の主張に重きを置いてくれるフランスやイタリアの地へ渡った。その後、再びスペインへ帰るも、彼への誹謗中傷が止むことはなかったため、最終的にロンドンに留まることを決断した。こうした中、故郷であるメキシコでスペイン本国に対する独立戦争が起きていた。故郷を想う彼は、ロンドンから 5 年間に渡り文書で独立を支援する宣伝を行った。

1815 年 5 月、彼はある将校との出会いをきっかけに再びメキシコへ帰ることとなり、現在のアメリカ・バージニア州に向けて船で旅だった。しかし彼の不運が止むことはなく、タマウリパス州 SOTO LA MARINA で再び捕らえられ、2 度目の CADIZ 送りとなってしまった。同年 7 月のことであった。

その後、脱出の機会を得てキューバのハバナへ辿り着き、アメリカへと渡った。それから再びメキシコの地を踏んだのは 1821 年、既にメキシコが独立を達成した後であった。メキシコに戻ってからも、ベラクルス州の SAN JUAN DE ULUA 要塞の牢獄に収容される生活が続いた。その後 1822 年の議会決定により、ようやく自由の身となることが許された。

その後、政治の道へと進み、その情熱を持って時の皇帝 AGUSTIN DE ITURBIDE を退任に追いやり、メキシコの帝政を終わらせた。それから間もなく 1827 年 12 月 3 日にその生涯を終えた。彼の名は現在、メキシコ立法議会の荣誉の壁に金文字で刻まれている。

## GENERAL DON DONATO GUERRA

(地図中 30)



1832 年 10 月 22 日、ハリスコ州 TEOCUIATLAN に生まれたレフォルマ戦争 (1857～1861) とフランス干渉戦争 (1861～1867) の時期に活躍した軍人である。幼少時代・青年時代と記録は残っておらず、歴史上にその名が現れるのは、1864 年 10 月 8 日に彼が自由主義派の共和国軍西部騎兵隊における大尉の位を得たときである。

同年、シナロア州での共和国軍と保守主義派の帝国軍との戦いで彼は 2 つの武勲を挙げ、その名を世に知らしめることとなった。また 1865 年のミチョアカン州 ESPINAZO DEL DIABLO での戦いや、1866 年に頻発したメキシコ北西部での数々の戦いで傑出した戦いぶりを見せ、1866 年に彼の故郷ハリスコ州は平和を勝ち得た。そして彼自身、ハリスコ州軍の騎兵隊大佐の地位にまで昇進を果たした。

続いて 1867 年には、フランスの支援を受けた帝国軍が占領していた、ハリスコ州の南に位置するコリマ州の州都コリマを解放し、フランス干渉戦争の最期の舞台となったケレタロまで進軍した(注:フランスによる傀儡政権の皇帝マキシミリアン MAXIMILIANO が処刑されたのが、ケレタロである)。

1867 年、Donato Guerra は後に大統領となる将軍ポルフィリオ・ディアスの軍に合流し、メキシコシティでの帝国軍との戦いに参戦した。彼らの功績により、皇帝マキシミリアンは失脚を余儀なくされ、自由主義派のベニート・フアレスが大統領に就任した。

共和国軍は勝利したものの、大統領ベニート・フアレスへの反対勢力による首都への攻撃が続いていた。彼はそれらの反対勢力との戦いで、引き続き騎兵隊を率いて勝利を収め続けた。1871 年 11 月 8 日、それまでの功績を称えられ、大統領により旅団の将軍に任命された。

1876 年 9 月、かつての戦友ポルフィリオ・ディアスが時の大統領 SEBASTIAN LERDO DE TEJADA に対して起こした、政権奪還に向けての「TUXTEPEC の陰謀」が始まると、彼は再び戦いを開始し、軍を率いてドゥランゴ州へ向かった。

その道中、彼に不運が襲った。彼の軍の中に LERDO 大統領派の裏切り者が混じっており、LERDO 派の分遣隊の襲撃に会い捕らえられた。彼は裁判を受けるためにチワワ州へ移送されていた。しかしチワワへの道中、ポルフィリオ・ディアス派の軍隊が到着し移送団を襲撃、LERDO 派の少佐を倒した。これにて救われるかと



思われた Donato Guerra であったが、LERDO 派はこの混乱に乗じて彼を殺害した。1876 年 9 月 19 日のことだった。彼の遺体は現在、メキシコシティのドロレス墓地でメキシコの英雄たちと共に眠っている。

## GENERAL DON GUADALUPE VICTORIA (地図中 29)



1786 年 9 月 29 日、ドゥランゴ州の TAMAZULA に生まれた独立戦争 (1810～1821) で活躍した軍人であり、メキシコ合衆国初代大統領でもある。

彼の名前は「MIGUEL ANTONIO FERNANDEZ FELIX」であったが、独立戦争での戦いを通じて「GUADALUPE VICTORIA」と改名した。

幼い頃は地元の神学校へ通い、その後メキシコシティへ拠点を移し、神学校 SAN ILDEFONSO で勉学に励んだ。そして独立戦争が幕を開けた 1811 年になると勉学から離れ、解放軍に入隊した。

彼の最初の戦いは 1812 年 11 月、オアハカでの戦いであった。独立戦争の英雄のひとり JOSE MARIA MORELOS もとで、「思想のために剣を抜け！」と自軍を鼓舞しながら剣を振って戦ったことが、彼を一躍有名にした。この恐れを知らない彼の戦い方こそが、後に「VICTORIA (勝利)」と改名した由縁である。その活躍を評価され、1814 年の「チルパンシゴ議会」にて解放軍の旅団長に任命され、政府軍にとって重要な港湾都市ベラクルスに派遣されることとなった。

彼はベラクルスの港からハラパへ向けて移動する政府軍の輸送船団を襲撃する計画を立てた。そして 1816 年に新たな副王 JUAN RUIZ DE APODACA (副王：君主国スペイン国王の代理として植民地を統治するものの称号) が着任するために乗船していた輸送船団を襲撃し、新副王の身柄を拘束した。

その後、1817 年までベラクルスに残り戦ったが、同年 PARMILLA という都市で政府軍に対し敗北した。それに加えて、メキシコ全土で解放軍に対する反乱も絶えず起きていたため、次第に彼の健康が脅かされ、独立戦争の終盤は前線に立つことはなかった。しかし解放軍は政府軍に屈することなく、戦況を巻き返し、1821 年、終に本国からの独立を達成した。

Guadalupe Victoria は仲間に対して優しく穏やかに接したが、いざ戦闘となると性格が豹変し非常に冷酷な一面を見せたことで知られている。

独立後、AGUSTIN DE ITURBIDE が初代皇帝として戴冠したが、Guadalupe Victoria は、王権神授説を信じる皇帝が解放軍の思想に基づいた行政を行うことに疑問を持ち、彼の統治に反対した。彼と後の大統領で当時は将軍であった ANTONIO LOPEZ DE SANTA ANA は、君主打倒し皇帝 AGUSTIN を退位させ、メキシコを君主国から共和国へと転換した。

彼は SANTA ANA によって、再びベラクルスの港での軍事任務へと送られた。そこでは持ち前の粘り強さと愛

国心で積極的に参戦し、政府軍を最後の砦 SAN JUAN DE ULUA 要塞へと追い詰めた。

そして 1823 年、2 名の同士とともに行政を担う「3 人組」を形成し、その自由主義の思想に基づいて、政治家としても活動を始めた。さらには同年 10 月 10 日、メキシコ合衆国初代大統領に任命され、その職務を 1829 年まで全うした。彼が改名を行ったのはこの時で、聖母グアダルルーペへの敬意と勝ち取った勝利にちなみ「GUADALUPE VICTORIA」としたのである。

彼の大統領就任の一方で、ベラクルスでは政府軍との戦いは続いていたが、1825 年 11 月 18 日、将軍 MIGUEL BARRAGAN 率いる部隊が SAN JUAN DE ULUA 要塞を占領したことで、本国の干渉から脱することとなった。

彼の治世は不安定ではあったが、対外的にはメキシコを国際的に独立国として承認させたことや、アメリカとの国境を再確定したことなどが評価されている。また国政においては司法機関をメキシコシティに移し、国家権力の拠点をメキシコシティに定め、政治の安定を図った。また公立学校の創設や国内医療の発展にも尽力した。

彼がその激動の生涯に幕を閉じたのは、1843 年 3 月 21 日、ベラクルスの PEROTE という町で、死因は長年患った病気であった。現在彼の遺体はメキシコシティにある「独立記念塔」の地下霊廟に眠っている。

<完>



### トピックス

#### 政策金利を 50bp 引き上げ

メキシコ中銀は 9 月 29 日、政策金利を 0.5% 引き上げて 4.75% に。2015 年 12 月の利上げ開始以降、本年 2 月と 6 月に続く利上げ。ペソ安進行に伴うインフレ対応が目的。8 月消費者物価上昇率は前年同月比 2.7% 台と目標圏内。中銀は 8 月末に実質 GDP 成長率を 2016 年 1.7～2.5%、2017 年 2.0～3.0% と下方見直し済み。

#### グアナファト映画祭で最優秀賞

グアナファト市で 7 月に開催されたグアナファト国際映画祭 (GIFF 2016) の国際長編部門で濱口竜介監督の「ハッピーアワー」が最優秀作品賞を受賞。4 人の女性たちが直面するそれぞれの人生の岐路を描く上映時間 5 時間余の大作。日本は初めての特別招待国。

☆映画公式サイト：<http://hh.fictive.jp/>

あとがき：キンモクセイの芳香が漂い、コスモスの花が揺れる季節ですが、秋雨前線と相次ぐ台風襲来で爽快な秋晴れが待ち遠しい。通巻第 28 号となる 10 月号では、メキシコ歴史文化講演会 2016 年の第 3 回と第 4 回の講演要旨を講演会欠席の会員にも理解できる内容にと、各回講師にお骨折りいただきました。また日墨協会の和久井会長には“新時代の協会”を目指す諸般の取り組みをご紹介いただきました。アミーゴ会も会員の声を真摯に聴きながら前進あるのみ。酒井梢恵さんご寄稿の「レフォルマの偉人伝」は今回で完結。アミーゴ会 HP にはメキシコ関連ニュースを毎日収集掲示する日英の「ニュース」欄があり、激動する世の動きのフォローに便利。9 月 30 日、御宿に「日本・メキシコ友好の家」が黒沼ユリ子会員と地元の協力でオープン。新しい活動拠点の飛躍に大いに期待。[20160930 か]